



北米ホーリネス教団  
オレンジ郡  
キリスト教会  
「週報」

2012年の努力目標

1. 朝の15分の祈りを大切に。
2. 1日2章の聖書日課に励む
3. 日ごとの写教に励む
4. 定期の祈り会に参加
4. 聖書研究・家庭集会への参加
5. 礼拝欠席の時は牧師に連絡を。

◎集会案内◎

日曜 礼拝 : 9:30~10:45am  
 コヒーアワ : 日曜日 10:45~11:15am  
 聖書の学び : 日曜日 11:15~12pm  
 みふみ会 : 水曜日 10am  
 定例祈禱会 : 水曜日 7:30pm  
 早天祈禱会 : 土曜日 7am  
 家庭集会 : 各地区に2箇所  
 牧 師 : 杉村 幸 (日本語部)  
           益田デーロ (英語部)  
 電 話 : (714) 827-6244 (教会)  
           (714) 527-1456 (牧師館)  
 E-Mail : sugimura1950@gmail.com  
 教会ホームページ : www.occc.org  
 教会所在地 : 4872 Bishop St.  
                   Cypress, CA 90630

石 叫 口

◎石叫■

「夜と霧」

アウシュビッツ強制収容所で過酷な体験をした精神科医ビクター・フランクルの「夜と霧」は、ある全国紙が二〇〇〇年末のアンケート調査「読者の選ぶ二十世紀に伝えるあの一冊」の翻訳ドキュメント部門の第三位に挙げられた。私も感銘を受けた一人で、再読して改めて人間の生死感について探られた。

「死に至る自己放棄と破綻、そしてもう一方の未来の喪失が、どれほど本質的につながっているかを劇的に示す事件が私の目の前で起こった。『先生、話があるんです。最近、おかしな夢をみましてね。声がして、「何でも願いごとがあれば願いなさい。知りたいことがあるなら、何でも答える」って。私が何と尋ねたと思いませんか? 「私にとって戦いはいつ終わるのかわからない」と言ったのです。私は『それで、夢の中の声は何て言ったんですか?』と尋ねると、相手は意味ありげにささやいた、『三月三十日』。このFという名の仲間は、私に夢の話をした時、まだ充分に希望をもち、夢が正夢だと信じていた(その時は三月の初旬であった)。夢のお告げの日が近づくのに、収容所に入ってくる軍事情報によると、戦況が三月中に私たちを解放する見込みはほとんど薄れていった。すると、三月二十九日、Fは突然高熱を発して倒れた。そして三月三十日、戦いと苦しみが終わるのであるうとお告げがあった日に、Fは危篤になり、意識を失った。翌日彼は死んだ。死因は発疹チフスだった。仲間のFは、待ちに待った解放の時が訪れなかったことにひどく落胆し、すでに潜伏していた発疹チフスに対する抵抗力が急速に低下したあげく命を落としたのだ。この一例とそこから引き出される結論は、私たちの強制収容所の医長が折りに触れて言っていたことと符号する。『この収容所は一九四四年のクリスマス直後にかつてない大量の死者を出した。それは労働条件からも、食料事情からも、伝染病の疾患からも説明ができない。むしろ、この原因は多くの被収容者が、クリスマスには家に帰れるという、素朴な希望にすがっていたことに求められる』というのだ」

パウロはピリピ書で「生きることはキリストであり、死ぬことは益である」(一・21)と宣言した。主イエスのために生きることのみならず、死ぬことさえ益だと言っているのだ。獄中のパウロの言葉だ。パウロがもしアウシュビッツに居たとしたら果たして「死ぬも益」と言えただろうか? でも、恐らく彼のことで、そうしたであろう。それは死を越えてキリストが希望だからである。それがパウロの信仰であった。希望をどこに据えるのか。それをこの書は問う。

「オレンジ郡キリスト教会の歩み」

オレンジ郡キリスト教会は一九七七年に発足し、東洋宣教会・北米ホーリネス教団に所属するプロテスタント教会の一つです。北米ホーリネス教団は一九二一年に創立され、現在は日英両語合わせますと二千名を越える会員になります。

私たちの教会は一八世紀に、英国で始まったジョンウエスレーによるメソジスト教会の流れを汲みます。そして他のプロテスタント教会同様、三世紀以来告白され続けてきた使徒信条を、私達の信仰告白といたします。

